

Title	横山源之助全集第1巻：日本の下層社会；ハイマン・カプリン著，辻野功，高井寿美子，鈴木則子訳 アジアの革命家，片山潜
Sub Title	The underworld of Japan, by Gennosuke Yokoyama, The collected works of G. Yokoyama, vol. 1, 1973, Tokyo ; Hyman Kublin, The Asian revolutionary, Sen Katayama, translated by I. Tsujino, S. Takai and N. Suzuki, Tokyo, 1972
Author	飯田，鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1973
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.66, No.8 (1973. 8) ,p.609(77)- 611(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19730801-0077
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19730801-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19730801-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

横山源之助全集第1巻

——『日本の下層社会』

ハイマン・カブリン著、

辻野功、高井寿美子、鈴木則子訳

『アジアの革命家、片山潜』

(1)

明治社会主義運動や社会問題の研究が、最近とみに盛んになり、文献の複製をはじめ、すぐれた業績があらわれつつあるのは、まことに喜ばしい。ここに紹介を試みる横山源之助全集第1巻は、彼の古典的名著である「日本の下層社会」を中心として、明治28年頃から30年代初頭にかけて、「毎日新聞」「国民の友」および「労働世界」などに掲載した論文を集めたものである。巻末には、隅谷三喜男教授による詳細な解説文が掲げられている。

また、「アジアの革命家、片山潜」は、外国人研究者によってはじめて試みられた片山潜の伝記の邦訳であり、従来、わが国においてなされてきた片山潜研究に、何ものかを付加しようとする努力のあとがいちじるしいのが印象的である。横山源之助と片山潜は、いわゆる同時代人として、労働問題や社会運動に志したが、横山は、いわゆる評論家として、片山は、労働運動および社会主義運動の職業的な指導者としての途を歩んだ。この両者には、それぞれの熾烈な問題意識の底に、共通したものを秘めながら、同時に、本質的には全く異った途をとらざるをえなかった必然性が存在したように思われる。その「共通したもの」とはすなわち、ヒューマニズムであり、社会改良主義であって、この両者は、明治30年代、日本の労働運動の黎明期においては、多くの指導者や先覚者を支えた共通項であった。尤も、片山の場合は、その初期の思想が、キリスト教的ヒューマニズムによって貫かれていたのに対し、横山の場合は、それほど鮮明ではなく、その意味ではむしろ、片山よりは高野房太郎との対比が興味深いものであろう。

注(1)「横山全集」第1巻350-351頁。

横山は何よりも調査研究者ないし社会探訪家 (social researcher) として、日本の労働者階級の生活の内面に立ち入って、客観的にその本質を把握しようとしたのにたいし、片山は、みずから、労働者階級の一員として、その労働生活の体験を通じて、その思想の変革を行い、革命家への途を歩いたのである。このような視角からみることによって、われわれは彼らの明治労働問題研究における意義を明確にすることができよう。

(2)

「日本の下層社会」を読めば明らかなように、横山にとっては、「労働問題」はすなわち、「貧民問題」としてとらえられていることである。ここに集結された多くの論文には、そのような「貧民」もしくは「窮民」として、労働者階級を把握しようとする論調が明白である。そしてそれを支える思想としてのヒューマニズムは、労働者の極端な低賃金にたいする憤り、職人間の得意争奪の現象にたいする慨嘆となってあらわれる。

「止だ一事此処に申上置度は、職人間に悽絶なる得意争奪競争のこれ有りしてと是れ。大工や、左官や、木挽、石工、畳屋、何れも平常得意なるもの有之、則ち渠等が法理上より申せば、得意は一個の固定財産と相成居候有様なりしものを。戦争の起り候而以後、その影響の悸々生活に及び候より、平時の道德観念を何れの棚へか仕舞い込み甲の得意を乙は侵入し、乙の尻を丙は奪わんと野心し、その奪取競争の激甚なる、当今外交問題に際し、各国政治家が胸裡に百疋の蝮蛇を蔵して、外面女菩薩やいのやいのと乗せ掛け候言葉の裏に、油断のならぬベテンの仕組まれ居候に異ならず。……十五銭、十四銭と糶売同様に賃金を下げて運動候程に、傭主に於ても甲労働者は自家が出入職人なりと称して、旧例を守る馬鹿律儀なるものなきが世の中、よく働いて廉なる方に札落とし候は自然の次第、如何しに斯う泥棒みたような人間ばかり寄り集まってる世の中なのだろう。或る職人の女房が呟き候も仕様のなきことに候。」

これは、「労役者と賃金」と題する、明治27年12月18日付の「毎日新聞」7220号に載せられた論説のなかの一節であるが、注目すべきことは、当時の労働者の貧困と、その結果としてもたらされた道義的頹落を、横山は、日清戦争の影響に帰していることである。

「論より証拠にイザ戦争と相成候而、新聞紙には痛」

快淋済なる討清論を其の社説に於て諷々論議せられ、志士論客の口角よりは滔々懸河の雄弁となりて大日本論を主張せらるるが見え、平常政府の事業に対して、消極主義をとり居る民党も、臨時議会で1億5000万円の臨時費を異議なく可決し、人より人に、町より町、郡、県、我日本帝国波を打って「日清戦争」という大ドラマの裡に、その理性も感情も、意思も之に投入し、吸収せられて、世は正に戦争となん呼ぶデビルに、魔せられけるにはあらざるかと、或る哲学者が眉を擧げて訝り候程の騷擾を対岸に、燻りたる燈火に悄然影を映して、夫婦太と息つき、晩食せざりし飢腸を抱えて、目途なき相談に心魂を疲らし居たるは、則ち第一この乙社会の人達にて候いける<sup>(2)</sup>

さらに労役者の意見として、

「政府の方達も無理なことをせらるるものかな、朝鮮国の東なろうと、西なろうとそんな事は此方の知ったことでなし、ほんに馬鹿な事せらるるものぞ。兵隊を沢山出して血気熾んの青年死なせ、大事の金を蒙塵埃芥のように遣い捨てるなどというは合点の行かぬ骨頂、それに聞けば、支那という国は、日本の十倍もありということなれば、幾程此方が威張ったとて勝てるものではない。是は何でも大臣とか参議とかいう役人共が仕業だ。それに違いない。馬鹿馬鹿しい事<sup>(3)</sup>。ああ、世の中のことは、一切訳らぬ事ばかりぢや」

ここに横山が、困難な労働問題の発生を、日清戦争の影響とこれにつづく資本主義の発展のなかにみていることは明らかで、とくに戦争による物価昂騰によって、もっとも深刻な影響を被った貧民＝職人層に焦点をあてていることは興味深い。とくに横山は、人力車夫に特別な関心をもっていたことは明らかで、これに相對過剰人口のいわば「溜り場」としての意義を見出している。

「爰に職業失して生活の途絶ち、正に一步陥らば犯罪に入るべき境遇に在りて、尚お其の者に一条の光明を与え生活の方向を教ゆるものあらば、先ず今日の日本社会に於ては人力車夫一階級に有すと知らずや<sup>(4)</sup>」

横山は、都会の貧民のみならず、野州足利の機業の

状況や労働力問題や労使関係にも注意を払っているが、とくに「大阪工場めぐり」を行って、東京地方とは異なる労働問題の様相を描いている。しかしながら、職人の社会や貧民の世界に同情をそそぎ、繊維産業の中小企業や鉄工場などに働く労働者の状態に注目したと同じように近代的なプロレタリアートともいべき鉄工労働者の組合にも大きな関心をよせ、鉄工組合の成立を祝賀している<sup>(5)</sup>。

しかしながら、横山の労働問題認識は、全体として、貧民問題として理解され、労働運動も、いわばこのような貧民の解放運動としてとらえられ、これにたいして、上から労働者＝貧民を啓蒙する有識者としての立場に自己を置いており、その思想は、高野房太郎のそれときわめて類似しているが、高野が実践家であったのとは対照的に、開明的な啓蒙家としてあらわれたのであり、同時代人としての片山とは異質なものを秘めていることが窺われる。

ハイマン・カプリン氏は、高野房太郎の研究をもってわが国に知られ、おそらく一時、高野の同志として活躍した片山の研究が、氏の絶好のテーマになったことは想像に難くない。筆者は数年前、この原著を読み、一方において、その序文にあらわれた片山潜に対する愛着の深さに感動したが、その反面、初歩的誤り——日本語の読み方の間違いを含めて——が多いのに気がついたが、今回の訳書では、この点は完全に訂正されている。なお、日本文献の出典についても、原典にあたる努力が払われており、まず良心的な訳であることがわかる。

この著作のもっとも大きな特徴は、アメリカでの彼の学生生活について、きわめてくわしくふれているが、しかしその前半にかんしては、ほとんど自伝に依拠している。「第13章社会主義の極点」の註24に、「『自伝』のロシア語訳とおぼしきものが、1926年にモスクワで出版された。それは『わが生涯』という書名で、80ページの長さであり、『モスコフスキー・ラボーチー』（『モスクワ労働者』）に発表されたか、あるいはその援助のもとに出版された」と著者は、本書の283頁に書いているが、これは最近出版された「わが回想」（徳間書店、1967年）である。晩年に書かれたこの「回想」は、不正確な叙述や、回想なるが故に、過去の生活の美化や

注(2) 上掲書 348頁。

(3) 上掲書 352頁。

(4) 上掲書 379頁。

(5) 上掲書 509頁。

## 書 評

潤色がみられるが、その意味では全面的に信用することはできないとしても、同時にまた、円熟した思想をもって生涯を描いている点では印象的であり、著者がこれを利用できなかったのは惜しまれる。

しかし、本書を読んで、もっとも感銘をうけるのは、第12章以下に描かれた片山の国際的な社会主義運動の闘士としての孤独な姿であろう。とりわけ、オランダのS. J. ルトガースとイタリア出身の運動家ルイス・フレイナとの交友が、片山にあたえた影響はまことに興味深いものがある。「多分ルトガースだけが、ロシアやヨーロッパや合衆国ではまだ一般に知られていなかったボルシェヴィズムの理論を理解していた」(287頁)とすれば、これらの人々との出会いは、彼の運命を大きく変えることになったことは当然である。

この意味で、「第14章ボルシェヴィズムへ」は、本書のなかで、もっとも興味深い一章を構成し、第15章とともに、彼の内面生活の推移と思想的变化を辿る上で、きわめて重要な示唆をあたえるものであろう。

本書の貢献は、何よりも、従来あまりくわしくは知られなかったアメリカでの彼の活動のうち、アメリカの日本人社会における彼の組織的活動に光をあてたことであり、つぎに彼のボルシェヴィズムへの思想的発展の跡を1910年代以後の国際的な社会主義運動の推移のなかで明らかにしたことであろう。しかしまた、本書

には、批判すべき点もまた少なくない。アメリカでの生活に重点を置きすぎた結果として、日本国内での彼の労働運動への関心、とくに、「労働世界」を通じての鉄工組合における活動が、不当に軽視されているため、高野房太郎との確執や労働者階級の意識的な立ちおくれのなかで、次第に急進化していった彼の姿が正しく描かれていない。

また、コミンテルン執行部内での片山の地位、Lenin死後の指導権の争いをめぐる権力闘争、いわゆる「血の粛正」の過程のなかで、片山が保持した態度が、果してどのようなものであったかは、必ずしも明らかではない。この点は、「第16章終着点」において、きわめて示唆的にふれられてはいるが、この点は、ソヴェートでの彼の足跡を原史料を通じて、更めて調査し、1920年代から30年代にかけての国際的な社会主義運動や民族運動のより精密な研究の下で、はじめてその全貌が明らかとなるであろう。われわれは、この点での今後の著者の研究成果を期待するものである(横山源之助全集第1巻、1972年12月、明治文献、B 6版、667頁、3,200円、「アジアの革命家、片山潜」、1973年2月、合同出版、A 5版、402頁、2,500円)。

飯 田 鼎  
(経済学部教授)